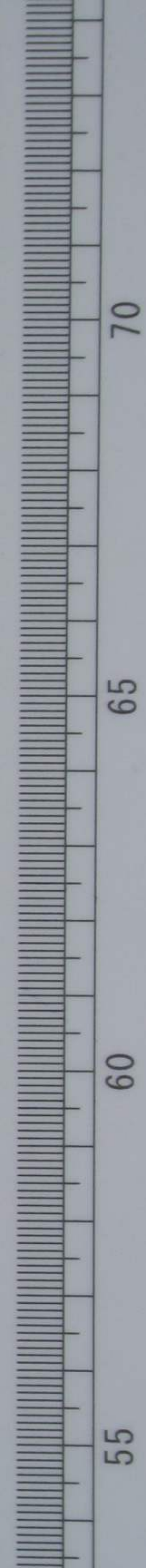
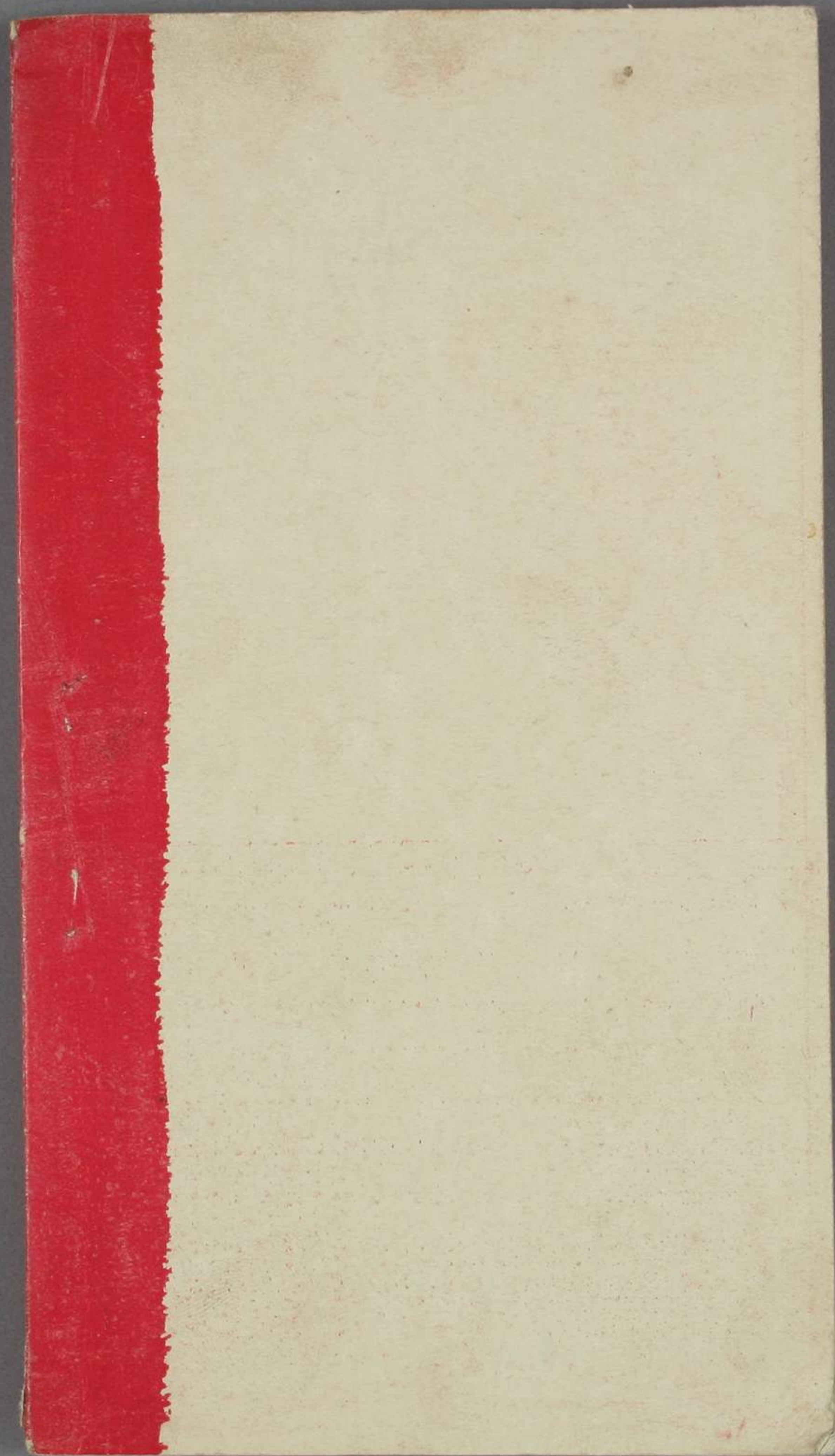
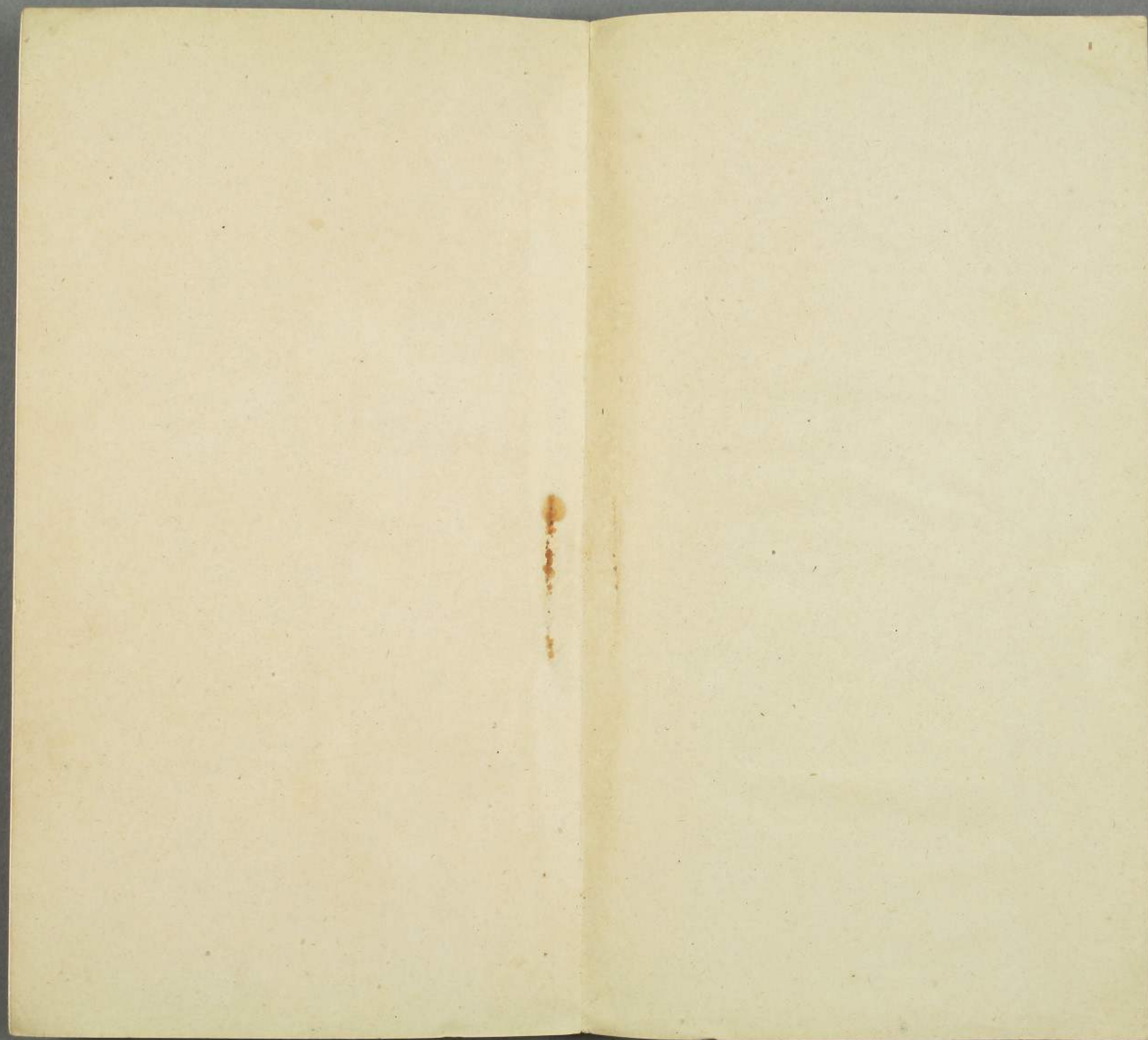


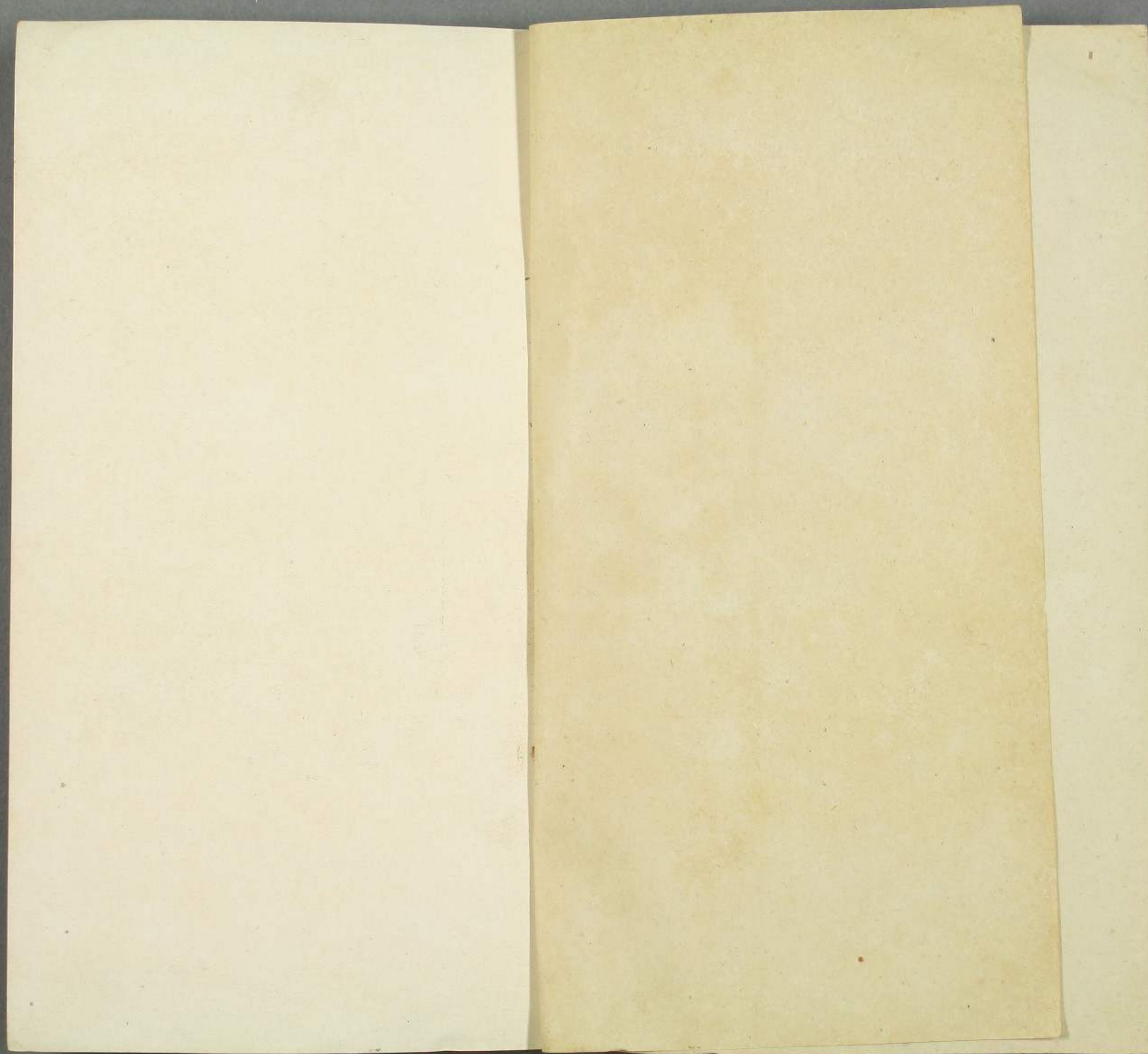
歌集
少年の歌
卷下・餓と戀の生半
篇二第集歌詩風朝











朝風詩歌集第二篇

歌集
少年の歌

下半生の戀と餓
巻

西出朝風著



幼時著者の母

此一篇を上田龍耳氏、西谷正治氏に呈する

本下卷には前卷以前或期間の作を収めた。
上下卷共其期間の全作に若干の選を施した
が、それには叢書體裁上の理由も加はつて、選の
標準は更にどうでも出来る者だ。
然し唯一首も新たに字句を改めた者はない。
要するになつかしく恥かしい返らない時だ。

海岸町の二年

大正元年初秋——同三年春。東京北品川

遊女屋に月さえわたる、半ぎよくが
たたく太鼓に、松のこずるに。

わがうへにはやくながれる歳げつも
路頭の秋に見ればうつくし。

生きがひのない生涯をうまさうに
荷馬車の馬が枯くさをくふ。

このごろはおなじ話をくりかへす
僕等になつた、友よ、をんなよ。

なにごとも忘れることをいいとせう、
あはく、みちかく、さむく、つめたく。

十四五のころにおぼえたさだめない
戀のころはけふもかなしく。

びすどるか、爆裂弾か、げつ琴か、
死ぬか、ころすか、旅におくるか。

世のなかのひとりふたりの人情の
なかに死ぬのもいいとおもふ日。

垣根ごしに自家^{うち}となりの妻君が
たかばなしする、梅雨ばれの空。

日のくれも人のすがたのはつきりと
見える五ぐわつは青くかなしい。

★

さみだれの晝間もした灯ひのしたで
女郎はかなしくおしろいをぬる。

はは親は泣いて子に書く「おたがひは
わるいつき日にうまれあはせた。」

めざめればまた死にさうな赤んぼの
こゑがどなりの家うちできこえる。

七

さびしいのは夏のよなかの十二時の
あかりにふれて蟲の死ぬとき。

ひるすぎの夏のながしへ子雀が
怖ちもせずくる、ふたりかたれば。

「死にます」といつた女が死なないで
もどつた。それはみじか夜のこと。

生涯のつまよ、寝てゐる生涯の
つまよ、おまへは無智だけれども。

だれもいふごんごん節もほろ酔の
女郎がうたへば涙ぐまれる。

水に似てみじか夜の灯のふけてゆく
なかにまづしいふたりはかたる。

めのまへの竹垣をはふ蛸蝓の
背なかもぬらす、夏の電燈。

みじか夜の人にまじつて喧嘩など
見あるくやうにこの世をも見る。

どんな氣でか日ぐれの町を少年は
荷馬車のあとについてあるいた。

童貞をやぶりましたといふときに
その友達をあかい顔した。

ちゆうがたのこまかいゆかたが似あふといふ。
……十七八にはかへられないか。

夏も、こかげに空いろの紫陽花が
ちつた上野の山はかなしい。

なに蟲かかたことことひとり寐の
蚊帳のうしろの明けがたになく。

鳳仙花、てつかふしろい巡禮が
なせきてくれた、せにのない日に。

日のくれた娘のうへうつくしい
しかし悲しいあけぼのはきた。

土にすむ蟲のたぐひが土をでて
朝のしめりにあそぶ夏の日。

寐ることとくふことのほかおまへとは
あかの他人だと言つたさびしさ。

あるときは心にもなく心にも
ないやうでほんとの心を言つた。

かなしみに心をやぶつたやうなことも
あつたとおもふが、まだ死にもせぬ。

あるときは他人のやうに「づうづうしい」と
つまものしる、つまものしる。

花の香にひたつてぬれたたましひの
つかれさびしく消えてゆく晝。

なにか事あるやうに人の立つなかを
いぶかつてゆくさびしいところ。

灯ひに酔つた西瓜のたねのやうな蟲
夏はうれしさをざるぬれ椽。

朱の櫛と緋のかんざしと立秋りゅうしゅうの
風にふかれる、夜よるの電車に。

寐てきけば子蜘蛛がそらをはしるほど
ほのかにひびくはつあきの雨。

恥おほい女房もちらが酔ざめの
かへり路をふく秋のよの風。

晝の蟲、草のにはひといふやうな
そんなものをもながくわすれた。

おなじめしひとつくふにもあばら家の
やうにさびしい家をたづねて。

天才をもつてきた身か、つまひどり
食はされない身か、ごつちでもいい。

無智もいい、無智にくはへた狡猾も
いいとおもつた、ある日、あるとき。

よし原のこみせの年増かた豆を
鼠のやうにかぢる秋の夜。

よし原のとある女郎屋の軒のはを
鼠のわたる、秋のよの風。

人におくれてひとへ物きたわれわれは
人におくれてひとへ物ぬぐ。

おたがひに自分をおもふ石ころに
ぶつかるまでは笑つてもゆく。

一枚のけつどのうへに縁あつて
かなしくねむるおやこ三人。

河へきて見ればかはらぬ河蒸氣
かはらぬみさをゆきかへりして。

自分のやうなものにも家があるのかと
春の日のさす部室を見まはす。

品川へかへるたのしさ、酒の町、
喧嘩の町へかへるたのしさ。

餘情

大正二年六月。——東京北品川

なほときに夫婦でもなく、いろでなく、
戀でもなうてむつましくして。

けふもなほうす蒼ざめて、泣きぬれて、
その夜の月がそらにかがやく。

今日きけば女ばかりか、そのときの
その人たちはながれながれて。

よしやいまかはい男とくせつして
その日のやうに暮らすにもせよ。

いつか逢ふ日のあるためか、生きてもう
逢はれぬためか、胸のいたむは。

いく月も無花果いろのなま疵の
たえないやうなこともあつたが。

それもはや四五年たつた、宵宵に
おまへをよんで夢のさめたも。

そのころをおもふはつらい、わすれるは
おもふにましてかなしいけれど。

きづな

明治四十四年九月——大正元年八月。加賀大聖寺

單純な女もいつか世のなかの
人のこころをささるあはれさ。

湯あがりのつまがそら見るかごぐちに
秋の日ぐれの竹の葉が鳴る。

眼めのいろをおづおづとして見ることを
かなしや僕はおやにならつた。

夜ひとり冬のこきやうの路に泣く、
おやもたふとい。つまもかはいい。

わがためにその生涯をうつくしく
投げたも縁だ。われもなげよう。

おそろしい破壊の子にも恩愛の
きづなはあつた、泣くに泣かれず。

なげつけてくらくかなしくわきを向く、
槍のほさきのやうなひとこと。

ちち親が生きてるかぎりふるさとの
土をふたたびふみはしなかる。

なんとなく四方^よのわか葉ののびるやう
ものいそがしく生きるこのごろ。

「おたがひを知るものは世におたがひ」と
泣くやうにいふ、母とむすこは。

風かをるこきやうの淵へひとすぢの
てぐすを垂れてわづらひもなく。

父は父、子は子でさびし、けふもまた
たがひの部室にとほくはなれて。

雨のやうかへるが鳴いて、川ぞこに
星がしづんで、月はおちゆく。

さらさらと風がわたれば髪をさく
やうに簫鳴る、夏の夜の川。

ごつちからともなくかたくだきあつた。
はなれはしまい、六ぐわつの雨。

ひるま見たおやこ鳥のありさまを
興じてかたる、寝ものがたりに。

「ごつからかなんかかなしい手紙でも
くればいいねえ。」「さびしいわねえ。」

ここにこの一首をしるす、かなしくも
たふとい父をのろふあかしに。

帝王をいたむ弔旗のうへにふる
夏のまひるの雨のしづかさ。

洲崎の埋立地に立つて

明治四十四年春——同夏。東京深川古石場

春の原、乞食の子らははは親の
そばにすわつて草笛をふく。

聲のいい乞食の娘沖を見て
まがいいいぶしをうたふ石垣。

見なじめば客をおくつた娼妓らが
聲をなげてく、箱番の窓。

うつくしい客とをんなと日がたけて
なほきぬぎぬををしむ海ぎし。

そののちの歌

明治四十三年十一月——同四十四年春。東京下澁谷羽澤

うらわかい駈落ものは小春日の
したのちひさい家いにかくれた。

坂したの大賊住んだ二階屋へ
かけおちものうつる小春日。

ふと逢つて牛屋で酒をのむけれど
あすは路傍の人となるのか。

晚にくふ米がないのにどうしたら
きのふのやうに腹がすくのか。

立關よるの夜の柱によりかかり
ふたりのあすのパンをおもつた。

ただひとことやさしく言つて頂戴な、
いそいそ米を買ひにゆかうに。

このつまもある日はくらい裏口を
泣いてでてゆく女だつたか。

この客は金貨の花をふみくらす
やうな話をにぎやかにする。

すが子等が死刑ときまる、つまは病む、
こころさびしい冬のゆふぐれ。

松脂を煮るかをりして、なつかしい
冬のちまたのゆふぐれの靄。

冬木立暮れるむかふを話^{はな}してく
鴉のやうな洋服のむれ。

ひとり酒のむはさびしい、乞食でも
どほれとおもふ冬のゆふぐれ。

いたましう彼等はあげた、離縁した
つま等のための宵のさかづき。

「考へてごらんさい。」とさむくいふ
まへにきのふの戀の身をおく。

なんといふわけもないうらさびしさに
夜よるのみやこの春くさをふむ。

つまにさへ顔見られるがはづかしい、
あまり自分の意久地ないとき。

青年はみなそれぞれに飲むだらう、
酒のこひしいけふの日ぐれは。

ああ愉快、夜の電車のポオルから
ペバアミントの酒がこぼれる。

平凡を偉大なことと知るまでの
七八年はおやを泣かせた。

なめらかに舌のうごくがうれしくて
けふも酔後につまをのしる。

あさ酒のやうやくさめるめのまへに
しづかに暮れる春の日のそら。

春の日はんだ色してうすぐもる
なかに木の葉をならす少年。

わがこころまたかなしくも波をうつ、
はる風宵の灯をさそふとき。

そのころの歌

明治四十三年夏秋。東京中澁谷並木

その人も泣いてわかれた、この人も
泣いてわかれる。夏柳かな。

ふるさとの知邊の山へ鳥がくる
秋まで待てよ、いとしわが妻。

尋常の二年へかよふきみちやんと
手をひきあるく、戀びどのやう。

油買ふせにがないので夜がくれば
いへがないやう町をさまよふ。

こひ人等物借るよりもたわいなく
生死のことを今日もちかつた。

しめやかに佐賀の故郷のものがたり
語るかひなを月がながれる。

夏の朝、鄙のくるわに風すれば
わかる人もほのにかをつた。

問ふままに死ぬる薬をしへやる、
生きて甲斐ないよるのをんなに。

とほい世の月のひかりか、雲か、灯ひか、
夜ぞらのはてに秋が泣いてる。

姉妹はたがひに嫁ぎ數百里
はなれて老いることなごをかたる。

おもかげが毒をあふいだ人に似て
さびしくだいたその夜のをんな。

月のうちのよつ日いつ日は金かねをもち
子供のやうにあそんであるく。

狂熱な人の行爲を見ることが
いつごろからかさびしくなつた。

おそろしい、鏡のやうなあきらかな、
心くもれとあふぐ泡盛。

秋ばれや、雪駄ならして大道^{だいだう}を
ゆくが子供のやうにうれしい。

めづらしいものはうれしい、友達に
借りたふたこの縞の羽織も。

わが娘なみだながして「誰となく
かね借るだけはよしてください。」

一杯の天ぶら蕎麥で一合の
酒をのむのが今日のたのしさ。

そのときが二十二三でなな八つ
ねえさんだつた、どこにくらすか。

「もしあなたが車ひいたらあとおしを
わたしやします。」と言つてうつむく。

おそ秋の雨夜の月の香のしたに
濡れて絃摩る、いとし、こほろぎ。

生き死にのわかれのあるを知りながら
死ぬほど今日も人がこひしい。

いつとなく都會の華奢に身をそめた
われもかなしい、秋のくれがた。

ものがたく屋敷奉公するといふ
風のたよりをきくはかなしい。

いつのまにかまたうつむいて沈みゆく、
満ちてしづかな盃のまへ。

續少年の歌

明治四十三年五、六月。東京中澁谷並木

なせきいた、儂い人の消息を、
二度と^とかへらぬ人のたよりを。

まよなかの長いてすりのすみにより
男をうらむ唄をうたつた。

きぬぎぬのわかればかなし、齒にのこる
その齒磨のうすいかをりも。

あけがたにわかれた人よ、星かげの
ひとつひとつに縁もうすれて。

やがて見る世界か、やがて見る人か、
夜ごとに赤い少年の夢。

郊外の曖昧茶屋の夏の夜の
ほかげに白い野いばらの花。

きみが家をとほくながめて夏の夜の
くもつたなかを泣いてかへつた。

郊外の曖昧茶屋のをんならは
小鳥のやうにけふもくらして。

かなしいのは、友よ、君とのあひだにも
たがひに言はぬことのあること。

うす白くなやんだ夏の夜の枝に
一輪さびしいハリー彗星。

マロニエの木このまをおちる星かげと
栗のほひにぬれてもどつた。

鑛泉のうへの草場にあそぶ子の
帽子あかるい夏の日のくれ。

五ぐわつの夜をしめやかに焼く清國の
留學生の窓のともしび。

おそくくる子でもあるやう窓ちかく
夏のあかりをながくともした。

なせかこの人のやくざの盃に
父のかほ深く、母の顔うく。

杉の香^かが靴にもつれる、杉垣の
うちを夜警す靴のひびきに。

うつくしいかすかぎりないまぼろしを
ゑがく娘にむかふさびしさ。

生意氣なほこりとおもひ、うつくしい
ほこりと感じ、つひにゆるした。

「ただそばにおいてください、ばあやとも
おもつてそばにおいてください。」

いまうたひつくさにやうせる、いまあふぎ
つくさにや消える、歌とさかづき。

口をしい、つらい、かなしいかすかすを
袋にいれて夜のみちへすてる。

どんな人にひるはれようとこの袋
口をひらくな、なんにも言ふな。

君のためにつらい悲しいおもひもした。
小供のやうなこともおぼえた。

バイロンに似た日もあつた、ゴルキーに
似た日もあつた、妙な少年。

五年見ぬ母の手紙に、釣魚つりうしをして
父は老後の日をばおくること。

とさどさは諷しえてよいことをいふ
「あまり風呂へもはいりますまい。」

花袋くわたいがいふ「おや子も戀も友だちも
みな平行の線をゆくのだ。」

窓したの屑よるうちの夕めしの
夏の灯ひを見て物をかながへる。

冬くれば夏の著物を、夏くれば
冬の著物を賣つてくらしした。

少年のあぐらのまへにふさはしい
山加と書いた貧乏徳利。

ただいちど酔つてだかれた女だが
毒をのんだときくはかなしい。

ある宵は睡眠たらぬわが友の
ひたひをてらす夏のともしび。

あけほのが雨戸のあなに朝がほの
やうににほふを見てねむる癖。

空も、木も、友達を訪へば友達も、
みんなさびしい顔をしてゐる。

病院の鐵窓を見るひるの夢、
自殺をおもふ夜のまぼろし。

わが胸も夜もかなしむ、浅草の
萬盛庵の火をおとすころ。

人生の大眞實がそのひとの
その眼を見ればきえるかなしさ。

いまおもひだしてもかなし、戀もなく
つまどくらしした三年の日は。

たはむれに酒と煙草をもちされば
わが少年は聲あげて泣く。

どうしてか酒がにがいと年わか
わが友だちは泣顔をする。

詩と戀と酒と煙草の名によつて
少年の世をけふもたたへる。

少年の歌

明治四十二年初冬——同四十三年五月。東京中澁谷並木

わがままな女だがいま離縁され
しをれてゆくを見ればかなじい。

こん夜きりあしたの月は見ぬやうな
姿をみれば心がみだれる。

春の日をいつばいためた臺どころで
ひとりしづかに露の皮むく。

をんな等のさそふがままにさそはれる
宮戸座うらの春のよの月。

春ををしむおなじこころの友にあふ、
千束町のおぼろ月夜に。

二三人きこく垣した庭内を
散歩してゐる春のよの月。

はるかせがからから寄せる夕かたは
落花の貝をふんでかよつた。

晩にそつとわたす手紙を粉煙草の
赤いふくろのそこへかくして。

きみの眼にくろい焰がもえたとき
人間の香が部室にあふれた。

おたがひにあざむかれるな、わすれるな、
別のおやからうまれでたこと。

春もはや夏にならうとする日のくれ、
犬のにはひのこひしい日のくれ。

生活に髪もみだれた母に似た
をんなを見れば春もかなしい。

をんな等が詩人をみれば一やうに
きちがひじみてゐるといひます。

幕

明治四十三年三月。東京中澁谷並木

はなやかな仲店ながみせの戸はしめられた。
五年の戀は一步ぽはなれた。

春やみをはせゆく黒い人力は
木賃やごへか、とほい旅へか。

すこしまへパイブほじるにかしたまま
わすれて行つた銀のひらうち。

しのび泣く女も青い、みちばたの
柳も青い。春のすがただ。

あすからはめし屋でくつて、居酒屋で
酒のむさびしいちらしい子よ。

さむい濃いわが家の間にふさはしい
くさい煙草のゴールドマイン。

五年間したとはちがふ戀をせう、
もしも五年のちにあつたら。

いまいち度あひたい、見たい、ねてみたい、
まへにわかれたこひとおなじに。

こひしさがうすらぐだろとあさましい
ことをしてみた、春のゆふべに。

あかんぼのこぶしほごある木のパイプ
買ったあくる日戀にわかれた。

うつくしい亭主をもつてうつくしく
くらししてくれよ、にくんだけれど。

窓みればおまへのゐないあくる日も
したのうちでは屑をよつてる。

毎日くるわかい女房の松ちやんは
ゐないときいて泣いてかへつた。

春さめがしくしくと泣くだいごころで
めしも焚いたよ、案じてくれるな。

またしても歌とか言つたそれに似た
ものがわきでることがかない。

いま黒い春のあらしのふく街を
おまへのすきな「おいち、にい」がゆく。

僕の歌のこの薄情なやさしさに
もういち度ほれる女はゐないか。

晝はこの村もにぎやかだ、齒いれ屋の
つづみ、飴屋の笛やなんかで。

こんどこそ未練はだすまい、ごしたつて
一生そはれる境遇ぢやない。

朝風詩歌集第二篇目次

(半生の戀と餓下巻)

海岸町の二年	大正元年初秋—同三年春	一
餘情	大正二年六月	二七
きづな	明治四十四年九月—大正元年八月	三三
洲崎の埋立地に立つて	明治四十四年春—同夏	四二
そののちの歌	明治四十三年十一月—同四十四年春	四五
そのころの歌	明治四十三年夏秋	五七
續少年の歌	明治四十三年五月、六月	七〇
少年の歌	明治四十二年初冬—同四十三年五月	九二
幕	明治四十三年三月	九八

半生の戀と餓 終

夜はすこし悲しいけれど未練ぢやない、
風が梢をふいてゆくので。

大正七年五月十五日印刷
大正七年五月二十日發行

特別第 九 號

石川縣金澤市千日町百五十二番地
著作及發行者 西出 邦子
石川縣金澤市千日町一五二純正詩社内
編輯者 朝風詩歌集刊行會
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷者 澤田 助太郎
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷所 明治印刷株式會社
石川縣金澤市千日町百五十二番地
發行所 純正詩社

朝風詩歌集刊行會趣意

私達氏に最も親しい者相謀り、今郷國加賀の一新聞社に職を奉ずるところ共に、雪猶ほ深い白山の麓に、思想、藝術方面に於ける獨自の途を心靜かに歩みつゝある私達の詩人西出朝風氏が、過去十餘年間の製作に係る詩歌集の刊行を企てました。

氏が其若い半生を費して成した詩歌の事業が、日本文藝史上に如何なる位置を占む可きか、夫れは私達親しい者の言葉で假定するよ

りも、反つて私達が世の批判を聴かうとする者であります。刊行の趣意の一半は茲に存します。

ただ回想的に氏の詩歌事業の外面に就て二三を記しますれば

一、(俳句方面)氏が最短の詩形俳句を試みたのは比較的遅かつたが、其主張は出發に於て已に極めて自由で、聽て當時の因襲であつた「俳趣味」「唯叙景」「唯客觀」「季題趣味」「題詠」等を排した文章を公表する間に新興俳句分野の大部分を占めた觀ある日本派に所謂新傾向派を生じ、新傾向派に更に分派を生じ、一步一步氏の主張の蹤を從ひました。然し其最善な者を批評して氏は猶ほ「大體善良な方面へ進んだが、詩の根本要素である音樂に全然無自覺だ」と言つてゐます。これは

俳句を純正詩(律語詩)にしようとする氏に於て當然の事でありませう。

一、(短歌方面)短歌に於て十七八年前の試作に緒を發し用語革命(現代語使用)を絶叫して來た事は最も世に知られた事實で、最近數年は一般をして氏を専門歌人のやうに思はしめた程、此詩形の製作に傾倒しました。尙ほ氏は用語革命と共に俳句同様短歌の純正を擁護して、彼の「破調」等を極力否定しましたが、「破調」が臨時で姿を隠し、用語亦日を追うて氏の主張に進んで來た事も事實です。氏は前者に就て言つてなります「内容と表現とが不離一體の者であるとしたら、用語革命は普通に信ぜられる以上に重大な意味がなければならぬ」と。

一、(長詩方面)長詩では氏が生粹の現代語新詩(俗語體等でない)を試作して間もなく、彼の口語詩運動が起り、前後して詩壇一般散文風に趨つて、兎もすれば詩體

の純粹である純正詩(律語詩)を忘れようとしたのに對し、飽迄純粹の擁護に努めて今日に到りましたが、爾後詩壇の傾向は漸次氏の歩みに近付きました。

斯う見て來ます時、氏が若し何等かの學閥、黨閥に縁故を有つてゐましたなら、詩歌集の如き恐らく數年前に上梓された事と信じますにつけ、私達今次の企ては詩歌を愛されます江湖諸賢の御賛同を充分期待し得る者と存じます。切に御援助を希望します。

大正七年三月

發 企 人

IV附録

京都市	竹久夢二	森井つゆ草	岡野かゝる
神戶市	上田龍策	吉田鼓山	天明愛吉
石狩市	野口証夫	土肥省作	西出悌二
岡山市	伊東音次郎	荒木巖	
備後市	山田禎一		
甲府市	森田熱郎		
能登市	望月喜雄	佐竹雨雀	
加賀市	草野志月	福田義正	三枝紅蔦
金澤市	額見曉人	西尾朧子	木戸紅蔦
	土岐まもる	上田良作	木村紅蔦
	上田榮	川端しのぶ	丘村紅蔦
	森雨橋	木村志郎	西村紅蔦
	山岸忠恕	椎木恒男	藤田紅蔦
	石浦露の香	西出つ木女	

V附録

朝風詩歌集刊行會規定

一、詩歌集は叢書として毎月一冊宛、若干月(六箇月以内)に互り刊行します。

二、每冊新裁四六判百二十頁内外、弘い愛讀を希望する趣旨に於て體裁の虚飾を避け、印刷、製本費等の低廉を期します。(一冊發賣定價參拾八錢)

三、會員はA、B二種とし

A會員會費

月額

參拾五錢

B會員會費

月額

五拾錢以上

B會員は特に刊行會の事業を援助する者です。

四、A會員には毎月叢書一冊を配付し、B會員には記念の爲め同上

番號記入、朝風氏自筆署名、特別(非賣品)一冊を配付します。

五、賛同者は入會と同時に會費二箇月分を拂込み、以後冊子受領毎に翌月分會費を拂込み、最初拂込の内一箇月分を最後の會費とします。

會費は冊子到着を以て領收の證としますが、別に領收證入用の方は往復葉書又は返信用郵券添送を願ひます。

六、入會申込所 純正詩社内朝風詩歌集刊行會

(附記) 本篇著次第次月分の會費を御拂込み下さい。既刊所要新入會諸君は既刊分會費同送の事。

朝風詩歌集第一篇目次

(卷上 戀の生半と餓上)

序	北國	流	浪
三十	ある男のなげき	ある男のなげき	ある男のなげき
前曲	をばりの首都生活	残した妻子へおくる消息	う
世	死んだ白雨君に	續	跋「山より」
大正三年	大正三年	大正三年	竹久夢二氏
六月	六月	六月	
九六	九〇	八二	
一〇二		六二	
		五九	
		五三	
		二二	
		一	

(第三篇) 朝風と其長男肖像入 六月五日發行
即興詩集 唐人笛 三十五篇

うすい光に。宵の灯。柵の花。夜曲。犬蓼。才。風は光は。浅春。暗い夜路を。神經よ。雪のあかりが。赤んぼの眼。ボンチ。断曲四章。となりでは。月はかなしや。品川小景。短景。笛。マツチの商標から。温室の悲劇。いる里。悔の日暮。夫婦。しぐれ。かくれ家。零時のかなしみ。浅草へ。思出。この眼を覆へ。しぐれさん。帆

新俳句集 ちる柳 二百餘章

(第四篇) 詩歌を裏書すべき文明批評 七月一日發行
感想録 周圍の兄弟へ 五十篇

朝風氏記念短冊色紙頒布會

詩歌集刊行を記念し其愛讀者諸君の爲め朝風氏揮毫短冊色紙頒布會
を作りました。御申込を希望します。(朝風詩歌集刊行會同人)

X附後

(揮毫種類) 甲、俳句と小畫。乙、短歌と小畫。丙、小曲又は

長詩の一節と小畫。氏の作中愛誦の章句を希望し得ます。

(短冊會費) 1、緣金紙地七十錢。2、緣金絹地、純銀箔地一

圓二十錢。3、純金箔地二圓。

(色紙會費) 4、緣金紙地一圓二十錢。5、緣金絹地、純銀箔

地二圓。6、純金箔地三圓。

會費は申込と同時に拂込の事。揮毫は一週間以内に發送します。